

「過疎」と呼ばれる集落における「復興」に関する現場研究

～小千谷市塩谷集落の葛藤を巡って～

崎浜 公之

本研究は、2004年10月23日に発災した新潟県中越地震の被災地における現場調査をもとに、地域が抱えている問題を明らかにし、地域の将来の在り方の方向性を打ち出すことを目的としている。具体的には、中越地震の被災集落の一つである、小千谷市塩谷集落の事例に注目した。同集落では、震災前には、49戸が生活していたが、震災を機に、29戸が集落を離れる結果となった。同集落では、先行研究において、村に残った人々と、村を降りた人々の間に、わだかまりや葛藤があること、また、村に残った人々同士の間でも、今後の方向性に関する意見の不一致から、葛藤があることがわかっている。本研究では、この集落内外で見られる葛藤の原因について考察し、今後の集落の在り方を打ち出していく。

筆者は、2012年6月から、2013年12月まで、同集落において、フィールドワークを継続的に行った。そのうち、2012年8月は、インタビュー調査、2013年8月から9月までは、現地に滞在して、アンケート調査を行った。そして、フィールドワークに基づくフィールドノーツ、インタビューデータ、アンケートデータを分析及び考察し、集落内外に見られた葛藤図式と、葛藤の原因を、エスノグラフィーと、ネットワーク分析により、明らかにした。

その結果、葛藤について、集落の伝統的な行事を行う主体と、非伝統的な活動を行う主体との間に対立関係があることがわかった。そして、人口が減少している現状においては、伝統が優先され、非伝統的な活動を行っている活動主体が圧迫されていることがわかった。そこで、葛藤の発展的解決を目指し、葛藤の原因について考察を行った。

考察は、アンケートの結果を参考にした。アンケートでは、限界集落でないにも関わらず、限界集落であると多くの人が答えるという結果が得られた。この結果から、人々は、限界集落に対する明確な定義は把握していないが、漠然としたネガティブなイメージを持っていることがわかった。ここから、塩谷集落では、ある経験を「過疎」として規定する規範が存在していることが示唆された。そして、漠然としたネガティブなイメージとしての「過疎」に対する不安や焦りにより、活動に優先順位をつけ、葛藤が起こっていることが示唆された。

また、集落の今後を考えるために、復興について考察した。塩谷集落では、震災によって、地域課題である過疎問題が露呈する結果となったが、災害からの復興という文脈においては、復興は終わったと言えるが、地域課題に向けての「復興」という文脈においては、「復興」は終わらないと考えられた。過疎問題の本態が、地域の将来に夢を描くことができなくなることであるなら、「復興」とは、地域の将来に向けて夢を描くことであると考えられた。

これらから、葛藤に対する発展的解決として、直接的な葛藤の解決を目指すのではなく、葛藤の原因となっている「過疎」の規範に目を向け、その規範の外部者との協働を通じて、地域の夢を描いていくという意味での「復興」を目指すことの必要性が示唆された。(ボランティア行動学)